

娘の登園時間は午前九時で、園ではいちばん遅い方の時間帯になる。だから娘を引き渡しに保育室に入ると、同じ二歳組の子どもたちはだいたいみんな揃っていて、ももちゃんだ、ももちゃんのパパだ、とか言いながら近寄つてきたり、それに応えて返事をしたり挨拶をしたりしながら父親は手提げから娘の着替えやマグカップ、食事用の口拭きタオルなどを取り出して所定の位置にセットしていく。娘には空になつた手提げを渡して、ロツカーにしまつてくれるよう頼むと娘は与えられたその任務に張り切つて取り組み、そのあいだ父親の方も準備がスムーズに進められる。もっともそう毎日うまくいくわけでない。父親としてはそういう算段で臨むけれども、思い通りことが進む日の方が少ない。そもそもそれは保育室にたどり着いた時点で娘が泣いたりぐずつたりしていることが前提で、保育室の前で娘の気がのらなければまずはあの手この手でなだめたり、説得したり、場合によつたら追いかけてつかまえて無理やり引きずつてくることになつたり、逆にこちらが引っ張り回されたりどつかれたりしながら準備をすることになり、程度は日によつて違うがむしろそういう日の方が多い。

今日は上々の部類で、娘は保育室に入るとその場でぐるぐるまわりながら、海苔巻きだー、と言う遊びをはじめたので、父親は娘がぐるぐるまわつてゐるあいだに身の回りの品を各所に収めて、出席カードを担任保育士のあかりさんへ渡した。娘は保育室にいたもうひとりの担任のみずきさんによる遊びを危ないからと止められつつも、そのまま友達たちが遊んでいる輪に入つていき、ももちゃんじやあね、と父親が声をかけてもう振り向かなかつた。哀しいが泣いて離れたがらないよりはこれでいい。保育室のドア横のガラスに張り付くようにして廊下を見ていたそうすけくんが真剣な表情で、新幹線、と言いながら手を伸ばしタッチを求めてきたので父親もこれに、新幹線、と応え

てタッチを返して保育室をあとにし、玄関でサンダルを履いて外に出るとふいちゃんが園の前の道路に仰向けて寝ていた。

ふいちゃんおはよう、と声をかけたがふいちゃんはこちらを向かず上を向いたままで、横に立っていたふいちゃんのお父さんとも挨拶を交わし、寝てますね、と言うと、寝てるんですよ、とお父さんは言つた。

ふいー、と寝転ぶふいちゃんに声をかけるお父さんは、その呼び声にさまざまな感情を込める。ふいちゃんのお父さんの額には少し汗が浮かんでいた。ふいー、ともう一度繰り返す。マスクで口元が隠れたふいちゃんのお父さんの顔を見ながらももちろんの父親は、と内心で自称して、その呼び声に込められたすべての思いがわかる気がする、と続けた。いつまでも付き合っているわけにいかない焦りや苛立ちももちろんあるが、ここで怒つてさらに機嫌をこじらせたり泣き出したりしても事態は好転しない。だから責め立てるような響きは慎重に排されてあくまで穏やかに、お父さんは困っているんだよということが伝わるよう、そして娘に理解と行動を求めるべく、頼むというよりは願うように呼びかける。ふいー、とお父さんがまた繰り返す。

白線が引かれた路側帯に仰向けて寝ているふいちゃんは、しかしそんなお父さんの声にまつたく応える様子がなかつた。寝ているといつても眠つているわけでも眠そうなわけでもなく、むしろふいちゃんの目はしっかりと開かれ、長いまつ毛も普段よりぴんと張つているように見えた。黒目がちなふいちゃんの目玉は動くことなく、まっすぐ空を見ていた。

よく晴れて日差しは強めだが、少し風もあつて気持ちのいい天気だつた。五月は子どもがいたつていなくたつて気持ちのいい季節だつたけれど、子どもが生まれて一緒に生活するようになると、子連れで屋外で過ごす時間がそれまでよりも長くなり、すると父親たちの五月の気持ちよさについての実感もまたちょっと変化した。ただ気持ちいいだけじゃなく、ありがたい気持ちになるのだ。

春先はまだ朝晩に冬の名残の冷え込みがあるが、五月になると夕方になつても寒さを

あまり気にしないでいい日が増える。日中の気温の上昇も穏やかで、なにより敷や植え

込みの近くにいても蚊がないから、いまの時期は子どもを外で遊ばせるのにあれこれ

心配が少なくて助かるのだった。六月に入ると気温も徐々に上がって雨も増えるし

蚊も出てくる。子どもと一緒に公園にいると体温が高く汗っぽい子どもの体は蚊の格好

の餌食で、親は寄つてくる蚊を追い払つたり叩き潰したりに忙しくなり、そもそも虫の

多さうなところで遊ばせにくくなる。子どもだけでなく親の方も子連れで外にいる大半

の時間は子どもの近くで遊び相手をしたり見守つたりしている時間だから、寒い日は寒

いし、暑い日は暑いし、知らぬ間にあちこち虫にも刺される。でも五月はただ外にいる

だけで、ただ立つているだけでも気持ちいい。そんな気持ちいい季節の晴れた朝だ。道

路に寝転ぶのだって気持ちいいだろう。ふいちゃんは四月生まれで少し前に誕生日を迎

えた。娘と同じ二歳組で、二歳組といつてもその年度の誕生日で三歳になる年だからふ

いちゃんももう三歳になつたわけだ。

こんな気持ちいい季節に毎年誕生日を祝えるなんて、本当に素晴らしいことだ。本当

に、と内心で繰り返すこの、本当に、は娘が最近覚えた言い方で、本当にすごいよ、と

か、本当に甘いよ、本当に眠いよ、とかいろんな言葉を強調しまくっている。ちょっと

タメを利かせた芝居がかつた言い方は、たぶん保育園で覚えたんだろう。昨日は公園で

ふいちゃんが娘と同じ言い方で、本当に恐竜、と言つてているのを聞いた。だから園で流

行つてているのかもしれない。娘のがふいちゃんにうつったのかふいちゃんのが娘にうつ

つたのかわからないし、あるいは誰か別の子がどこかで聞いたか、家族の口癖を真似た

りしたものかもしれない。園の玄関の掲示板には園内で感染性の胃腸炎とヘルパンギー

大、手足口病が軽く流行中で、それぞれの発症人数が報知されていたが、幼児が集まつ

て日々を過ごす保育園ではウイルスだけでなく語彙や語法や発音も経路のわからぬまま

ま伝わっていく。言葉以外にも、ちょっとした仕草とか友達に対する立ち居振る舞いとか、あらゆるものが受け渡され、学ばれ、そして試行されている。

そうなんですよね、とふいちゃんのお父さんは言つた。ふいもこのあいだ夕方一緒に歩いてたら唐突に、お父さん長生きしてね、って言い出して。どこまで意味がわかつて言つてるのかわからいいんですけど、そんな物言いいつ覚えたんだろうって思つたんですけど、と話すふいちゃんのお父さんのマスクがずれて、見慣れない口元が露わになつた。

園では職員や保護者の登降園時のマスク着用は四月から任意に切り替わり、五月の連休明け頃にはマスクを外す保護者もだいぶ増えてきた。花粉症シーズンが終わって気温が上がってきたこともあるだろうし、四月からひと月ほどで特に大きな状況の変化がなかつたことも影響していたと思う。自分はといえば、園内では口元にあてていたマスクを玄関から外へ出てあごまでずらしたところだつた。ともあれ、この二年間マスクを着けた顔しか見てこなかつたひとの素顔というか文字通りの全貌をこうして不意に目にすると、勝手に思い描いていた顔と全然違つて驚いてしまうことがある。ほとんど毎日のように顔を合わせていたのに急に別人になつたみたいで、しかし別人のはずはなく、こちらが長いこと勝手に別人のような顔を思い描いていただけだ。しかしその顔はどこの誰の顔だつたのか。

おとなだつてそんな具合なんだから、生まれてからこっち家の外では大半のひとがマスクをしている世界で過ごし続けてきた娘やふいちゃんにとつて、この春急速に顔面が露わなひとが増えつつある状況はどのほうに受け止められているのか、ちょっと想像がつかない。

園の保育士さんたちも、着用が任意の方針に切り替わると同時にマスクを外して仕事をあたるひとが多かつた。そのことを思うと、ちょっと胸がつまるような、涙が出そうな感じになる、とももちゃんの父親は思った。言語での意思疎通がままならないこともある保育の現場では、意思疎通やスキンシップにおいて表情や声に負うところも平時か

ら大きいはずで、マスクで顔の半分が覆われた状態での保育の仕事はきっと相当な苦労があった。自分が娘を見る限り、保育士さんたちがマスクを外したことへの驚きや反応はほとんど見られなかつたが、これはマスク着用でも不足のないよう彼らが娘に接していたからなんだろうとももちゃんの父親は考えていた。具体的には技術は素人にはわからないが、たとえばアイコンタクトの仕方や声量や声質の工夫、身振りなどを使って口元が隠れていることを補うための工夫が、制限の多いなかでも日々行われていたのではないか。娘は、この春、保育園で担任のあかりさんやみずきさんが、ももちゃん、と自分の名を呼んでくれるその口元をどんなふうに見ていたのだろうか。

娘の反応の薄さの反面、ももちゃんの父親は方針変更の期日の朝、保育士さんたちが素顔で園内にいるのを見たとき、いたく感動してしまつたのだった。マスク着用の科学的な是非は自分には判断できない。あとになつて任意に切り替えたのは時期尚早だったとわかる可能性だつてあるのかもしれないが、そのときの感動はそういう是非とは関係がない、とももちゃんの父親は言う。光差す朝の園内で、ずっと隠れたままだつた保育士さんたちの顔が露わになつているのを見たとき、彼らの三年間の見えない苦労と努力がネガのように一瞬反転してその光景に現れた気がした。それは彼らの苦労と努力であると同時に、彼らが娘たちのことを大切に思いやつてくれた確かな時間の表れでもあつた、とももちゃんの父親は思った。あの瞬間のことは、その是非がたとえいかなるものであつたにせよ、忘れることはないだろう。

目に見えるひとの顔は隠れているものと現れているものとでは現れているものの方が強く、二年間思い描き続けたマクスの下の顔たちは、記憶のうえでもほんのひと月足らずであつさりマスクを外した顔に書き換えられていき、はじめは戸惑つた誰彼の素顔にも慣れつつあつた。そしてマスクの下にあるはずと思い込んでいた顔たちは徐々に思い出せなくなつた。誰のものだかよくわからない顔たちが、誰のものだかわからないまま思い出されなくなる。さようなら。

さまざまな対策の有効性について自分たちが証明することはできないのだし、それぞれに得た情報を信じたり疑つたり精査したりして判断するほかないからその判断の有り様は家族構成や仕事やその他いろいろの事情に応じて少しずつ違うものになる。だからそのことをカジュアルに話題に挙げるのはまだなんとなく避ける向きがあった。それでも同じ年頃の子どもを持つ親や家族というのは、感染症の流行がはじまって広がりつつある時期に、母体とその胎内にいる子どもたちができる限りその危険から遠ざけたい、しかしどうすればいいのかよくわからない、という同じ恐れを共有したひとたちだつた。ふいちゃんの両親もきっとあのさなか、自分たちと同じように見えないウイルスを恐れながら過ごしていたのだと思うと、ももちゃんの父親はいつかその不安をみんなでねぎら
労い合いたいとも思う。

長生きしましよう、とふいちゃんのお父さんに言うと、ふいちゃんのお父さんは、ははは、と笑つて、ももちゃんのお父さんも、と言つた。お互いに長生きしましよう。そして寝転び続けているふいちゃんにまた視線を落として、ふいー、と言つた。

ふいちゃん、ももちゃんもう部屋にいるよ、とももちゃんの父親はふいちゃんに声をかけた。日が違えばふいちゃんとももちゃんが、というかふいちゃんの父親と自分が逆の状況のこともあるからこういう場合は全力で助け合いたくなる。ももちゃんもいるし、そうすけくんもいたし、たもつちゃんもいたし、ちーちゃんもいたし、とももちゃんの父親はさつき二歳組の部屋で見た娘の友達たちの顔を思い出しながら、名前を挙げていった。こうたろうくんもいたし、りんちゃんときんちゃんもいたし、あとはえーつと、指を折りながら十二名いる同じ組の子どもたちのうち、ふいちゃん以外の子の名前を全員呼び上げて、あとあかりさんもみずきさんもいた、と保育士の名前も付け加えた。

ふいちゃんは微動だにしない。

朝起きてから登園まで、つまり親元に娘がいるあいだに多少の行き違いや滞りや衝突がないなんてことはまずなく、それらをなるべく未然に防ぎ、生じた問題については

それ以上こじらせぬような穩便な解消に努めることで、トラブルを最小程度に抑えたい。とはいえたにトラブルが少なければいいわけではなく、どんなに順調にことが進んでも園の引き渡しの際に機嫌が悪ければ意味がない。最終段階である保育室への入室、そして保育士さんへの引き渡しに最高の状態で入つていけるよう、あえてわがままやぐずりを泳がせて登園時間から逆算したタイミングまで機嫌をとるのを待つこともある。

こちらの思い通りに動いてくれればなんでもいいわけでもなく、物で釣つたりするのは麻薬みたいなもので、使い過ぎると結局それでなくては動いてくれなくなる。これはとりうる選択肢の幅を自ら狭めてしまうようなもので、それは子どもにとつても気の毒だし親の方もあとあと苦労することになると思うから、動かぬ娘をお菓子で誘導したりスマホの動画を見せたりするのはよほどどうしようもないときだけにしたい。というのは、いつだつたか休みの日に公園でふいちゃんを連れたお父さんと出くわし、娘とふいちゃんが砂場で一緒に遊びはじめたのでその脇であれこれ話しているうちに自然と話題は日々の育児の苦労話になつて、そこで概ねふたりが同じような理念と対処法を心中に掲げていることがわかつたときのその骨子である。

それまでは送り迎えのときに顔を合わせて当たり障りのない世間話をする程度の間柄で、立ち入った話をする機会なんかなかつたからか、その日のふたりの話はやけに盛り上がり、あとから思い返すとちょっと過剰なほどに互いに共感を表明し、日頃の奮闘を伝え合つた。細かい部分は我が家の状況に沿う言い方になつてしまつているだろうが俺たちは、とももちゃんの父親はあえて俺という一人称で複数形をつくり、俺たちは語らい、そして共感したんだ、と言いたい。

先のような理念を掲げつつも、実際そんな思い通りにいかないから妥協と失敗の連続だ、という実情と歯痒さの吐露もまた、強いシンパシーとともに共有された。まわりを

なんとなく観察していても、自分たちの考えがそう周囲と大きく異なることはないような気がする。どの家庭でもきっと同じようなことを考えては、理想と現実のギャップに悩んでいる。でも重要なのは理念の共通性とか特異性ではなく、それが俺たちのもとで、ふいちゃんのお父さんとももちゃんの父親のもとで共有され、共感されたことだ、とももちゃんの父親は念を押す。

ももちゃんとふいちゃんは〇歳組からずっと一緒にいたから、親たちには同じ道を辿つてきて、そして辿つていくような仲間意識がなんとなく醸成されていたし、どちらも第一子で親にとつてははじめての育児だったことも共通していた。ももちゃんもふいちゃんも生まれたときからずっと感染症対策のなかを生きてきたから、保育園の保護者間の交流も自ずと遠慮がちなものになっていて、あの日の砂場の脇で生じたふたりの雑談のなかの静かな高ぶりにはその反動もきっとあった。保育園に限らず、他者と日常的に卑近な話を気軽にするような機会はずつと抑制されてきたのだが、気軽に雑談じやないと話題に上がらない大事な話題というのがたぶんあって、育児において日々積み重ねられる経験値や試行錯誤なんかもそういう類の話なのかもしれない。

ふいちゃんは依然として道路上で仰向けになつて空に目を向け、真剣な顔つきを崩さずにいた。ふいちゃんのお父さんは、ときどき、ふいー、とその名を呼びながら、さつきの娘に長生きしてねと言われた話は実は少し詳細を端折つていて、ともちゃんの父親にもう少し細かい説明をしようか迷つていた。長生きしてね、という娘の言葉について、どこでそんな物言いを覚えたんだろう、とまるでよくある育児の話のように語つてしまつたけれど、実はあれを言われた前日に相模原の自分の実家を家族で訪れ、そこで最近少し体調を崩していた自分の父に向かって妻が、長生きしてくださいね、と言つたその言葉を娘は覚えていたんだと思う。ちゃんと意味をわかつているかは怪しいが、大事なひとをいたわるニュアンスはきっと感じ取つていて、それを父親である自分に向けてくれたのだと思う。それは結構忘れがたい瞬間だったから、いたずらな改変ではない

にしろ、背景の事実を捨象して話してしまったことは、娘に対するちよつとした罪悪感を生じさせた。しかしその背景を話しあげるなら、話は自分と父親のあいだにかつてあつた確執や幾度かの衝突と雪解けを経て現在の、良好とまではいかないがときどき孫の顔を見せに行ける程度の関係性に至つた経緯を話す必要が生じるかもしれない、それはいまこの場で説明するにはあまりに煩雑だった。

感染症の心配がもう少し薄れたらももちろんのお父さんを一度飲みにでも誘いたい、とふいちやんのお父さんは思うが、子どもを妻に任せて父親同士が飲みに出るのは実務的にも心理的にもまだなかなかハードルが高く、それが実現したのはこの何年もあとのことだった。送迎の頻度や服装なんかを見ると、自分も相手も基本的に在宅で仕事をしているように見受けられるが、自分たちは互いがどういう仕事をしているひとのかいはまだ全然知らなかつた。

ともあれこのひとはだいぶ子どもが好きで、いまも自分の子の預け入れは済んだのにここにとどまつて一緒に路上に寝て いる娘を見下ろしている。子どもだけでなく、保園が好きなのかもしれない。たぶん一年くらい前、娘たちが一歳組にあがつて、同じ組の子どもが一気に増えた頃だが、ももちゃんの父親は子どもを預け入れたあと、あとから登園してくる子どもや保育室の外を通りかかる子どもと遊び続けてしまい、なかなか帰らないので保育園からやんわり注意を受けて いるのも見たことがあった。感染症対策がいまより厳しく、送迎時の滞在時間もできるだけ短くするよう に言われていたし、対面上は子どもを預けたあとは就業時間になるわけなので、保育園でのんびりして いてはまずいわけだ。

今朝の娘は保育園まではいつもと変わらず来たのだが、恐竜を見たいと言うのに、恐竜はない、と応えたのが失敗だつた。同じやりとりはこれまでにも繰り返されたことがあり娘は恐竜が大昔に絶滅した話を聞くと、恐竜はいる！と主張してときに激怒し、ときに泣き喚き、今日の場合は道路に寝そべって登園拒否の姿勢をとつたのだつた。いつからこんなに恐竜が好きになつたのかもよく思い出せないが、日に日に娘が

口にする恐竜の名前は増え、どこで覚えてくるのか親の自分も聞いたことがないような名前もあり、適当に言っているのかと思つて調べて見るとちゃんと実在する名前で、図鑑を見てはいつかんどれがどれだか見分けのつかないようなものも、ちゃんと見分けて正確に名前を言つてゐる。最近ではすごいねえと褒めるのを通り越し、その極端な入れ込み具合と知識量がちょっと怖く感じることさえあつた。

ゆつくり流れいく薄い小さな雲や、ときどき横切る鳥や飛行機はもちろん、ずっと見続けていれば空の奥の奥、夜にならないと見えないはずの星の影さえも青空のなかに見えてくる。薄い青色の向こうに夜空みたいな暗い広がりがあるのがわかつて、あのどこかになにかがいる。お化けもいる。宇宙もいる。そしてたぶん恐竜たちもいる。本に載つてゐる恐竜の名前と形を次々に覚えたのに、本当の恐竜は未だ見ることができない。恐竜はいない、とお父さんもお母さんも言うのだった。あれは大昔の生き物だと言つうが、あんなに大きい生き物がどうしていなくなるのか。ふいちゃんのはそれが信じられない。なにか本当ではないことを教えられている気がした。本のなかにはこんなにもたくさん恐竜がいて、平氣そうにしているのに、恐竜がどこにもいないというのはなにかがおかしい。いないわけじやなく、電車や車で簡単に見に行けるような場所にないといふだけで、どこか遠くにいるつてことなんぢやなか、とふいちゃんはさつき思つた。だつたらそう教えてくれればいいのに、連れて行けとせがまれたら困るから、どこにもいらないなんて言う。ふいちゃんはまだ知らないことはたくさんあるが、数少ない知つてゐることのひとつは、どこにもいらないものなんてない、ということだ。恐竜でも、人間でも、誰でも、必ずどこかにはいる。そんなの当たり前のことぢやないか。恐竜がいないなんて嘘はあまりにその場しのぎの詭弁きべんである、とふいちゃんは思つてゐた。たとえば、と道路に寝転んでみる。遠くて行けないならその遠さを地面から離して空に向けたらしい。

考えてみれば空だって、そこにあるようでどこにあるのかよくわからないもので、しかし空がないなんていうひとはない。夜になると空の奥から暗い方の空はがじわりじわりとせり出してきて、星の輝く夜空になる。あれもまた恐竜の類かもしれないし、あの暗い宇宙というらしい夜の空の一角の広がりのどこかに恐竜たちがうようようようよ草を喰はんだり、襲つたり襲われたりしながら暮らしている。あ、イグアノドンだ。晴れた空に目を凝らせばそれが見えるかと思つたら、やっぱりちょっと見える。あ、プテラノドンも見えた。宇宙も、恐竜のいる星もずっと見ているとだんだん見えてくる。いろいろ、ティラノサウルスもいるし、ブラキオサウルスも、ステゴサウルスもいる、本当にいる、本当に見える。恐竜に長生きしてほしい。

空高く見つめ続けながら恐竜の名前を唱えはじめた娘の横にしゃがみこんで、ふいちゃんのお父さんは、たしかに二億年前に地球上に現れてやがて絶滅した、なんてそんな話をどう説明したらしいのか本当のところはわからない、と思つた。

イグアノドン。

いるいる、いたよ。

トリケラトプス。

トリケラトプスもいた、二歳組の部屋に来てた。

アンキロサウルス。

いたいた。二歳組の部屋で遊んでた。だから行ってみなよ。

ももちゃんのお父さんがいい加減なことばかり言ってくるが、保育園には恐竜はない。保育園に恐竜がいたら大変なことだ。そんなこともわからないのか。そんなこともわからないと思っているのか。空の向こうにいるのが、やつと見えたところだ。いまここから動いたら見えなくなりそうだから。今日は一日ここでこうしている、ここで恐竜を見ている、とふいちゃんは思った。

しかし、今日は遅番だつたらしい保育士のゆみさんが通勤してきて、ふいちゃんおはよう、一緒に行こう、と声をかけるとふいちゃんはさつきまでの膠着状態が嘘のようすつと立ち上がってお父さんを顧みることもなく玄関から園内に入つていき、さつさと保育室に向かって歩いていった。ふいちゃんのお父さんはももちゃんの父親に、すいませんじやあまた、と会釈をするとふいちゃんを追いかけて玄関に向かった。

（滝口悠生著「恐竜」二〇一五年、河出書房新社、『たのしい保育園』所収）